

AWS INNOVATE 2020 オンラインカンファレンス

「要件ごとにうまく使い分ける「オンプレミスとAWSの接続方法」」 のクイズおよび解答

AWS INNOVATE 2020のセッションの視聴およびアンケートにご記入頂きありがとうございます。本資料が「要件ごとにうまく使い分ける「オンプレミスとAWSの接続方法」」で出題されたクイズの解答になります。

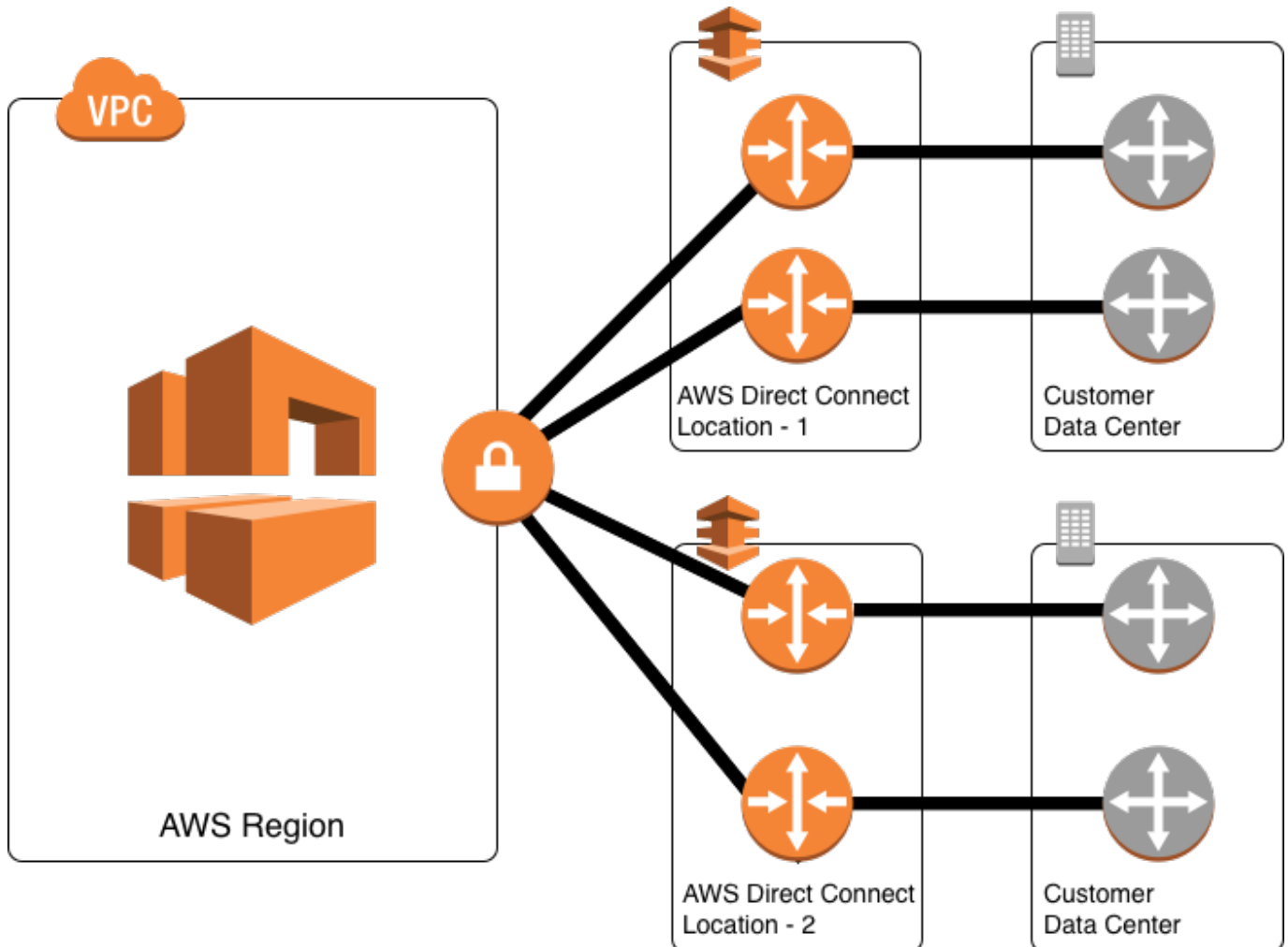
問題：オンプレミスとAWSを接続する際、堅牢性の高いネットワークとするためには、どのような構成にするべきでしょうか？設計する際の要件やオンプレミス内の構成も含めてお考え下さい。

解答：コストをかければより高い可用性を持つ構成を作る事は可能ですが、大事なのは「その通信が利用できなくなった時にどれくらいの損失を伴うか？」という試算と、投資可能な予算のバランスです。これはAWSクラウドに限ったことでは無く、オンプレミス間を接続するネットワークにも同様の事が言えます。こうした前提を理解した上で、AWS Direct ConnectのSLA適用基準を参考にして、適切な構成を設計するのがベストプラクティスです。

AWS Direct ConnectのSLAにおいて、クリティカルなワークロードを担う環境で99.9%の可用性を目的として構成する環境は、異なるロケーションに各1本、合計2本の物理的なDirect Connect接続を配置し、VPC上のリソースにおいてもマルチアベイラビリティ環境に分散配置する事が望ましいとしています。その場合、仮想インターフェイスを終端するお客様ルーターにおいても、それぞれ別の機器に接続いただいて、それらの間をIBGPで経路交換する事も考慮ください。

また最大限の回復性を実現するため、さらに高い99.99%の可用性が必要な環境でしたら、異なるロケーションに各2本、合計4本の物理的なDirect Connect接続を配置する事もご検討ください。

以下にて参考図を掲載いたします。



図：クリティカルなワークロードの最大回復性

ご参考リンク

- AWS Direct Connect の回復性に関する推奨事項

<https://aws.amazon.com/jp/directconnect/resiliency-recommendation/>